



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3436号 2017.1.2 発行

【東ちづるさんインタビュー】「まぜこぜの社会」は居心地良い 2020年は希望の年「気づきの機会増える」 産経新聞 2017年1月1日



昨年4月2日の「世界自閉症啓発デー」に東京・渋谷で開いたイベント「Warm Blue Day」で、テーマカラーのブルーのTシャツを着た忠犬ハチ公の銅像と東ちづるさん (c) t o b o j i

2020年東京五輪・パラリンピックには世界中からいろいろな人たちが日本にやってくる。年齢や性別はもちろん人種や国籍、宗教も違う。車いすの人も目や耳が不自由な人も、自閉症や発達障害のある人もいる。こうした多様な人たちを包み込み、支え合い共生できる「インクルーシブ社会」を目指す動きが広がっている。どんなときでも誰も排除しない「まぜこぜの社会」を目指して

活動を一般社団法人「Get in touch」の代表で女優の東ちづるさんに話を聞いた。

――Get in touchの活動を始めたきっかけは

「東日本大震災の避難所の様子を伝える小さな記事でした。車いすの人が『ここはバリアフリーではないので』とやんわり断られたり、自閉症の子がパニックを起こしたら『静かにさせろ!』と怒鳴られたりするということが起きていた。『絆』や『寄り添う』という言葉が盛んに使われる一方で、社会が追い詰められ、不安になると、障がいや病気といった生きづらさを抱えている人たちが、ますますつらい思いをするという現実がありました」

――なぜでしょう

「普段から多様性を認め合っていないからだと思います。私たちは、いろいろな特性を持った色とりどりの人たちと一緒に生きているはずなのに、それを体験として共有できていない。とにかく一緒にいれば分かってくることがある。緊急のときには『支援』や『援助』も必要だけど、一緒にいれば、普段から互いに支え合い、助け合うことができると分かる。それが『まぜこぜの社会』です」

――まぜこぜの社会を実現するのに必要なことは

「『Get in touch』は、『つながる』『つなげる』という意味ですが、『絆』のように深く強くつながる必要はありません。普段から広く浅く緩くつながっていることが大切なんです。排除したり、のけ者にしたりしないことが大事なんです」



――多くの方はまぜこぜを体験する機会がなかなかありません

「私たちは講演やシンポジウムはしません。音楽やアートといったみんなが一緒に楽し



めるイベントを開いて、まぜこぜの社会を視覚化、具現化する活動をしています。結局、楽しいところ、居心地の良いところにしか人は集まりません」

――例えば、どんなイベントですか

「国連が定めた『世界自閉症啓発デー』の4月2日に毎年、街をテーマカラーのブルーに染める『Warm Blue Day』というイベントを開いています。そこでは、自閉症の人はもちろん、車いすの人も目や耳が不自由な人も、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）といった性的マイノリティー（少数派）の人もみんな一緒にいる。自閉症の子供の親御さんは、こんなに大勢の人がいるイベントに来たことがないと心配するのですが、不思議とこれまでパニックを起こした人は誰もいません。まぜこぜの社会は本当に居心地が良いんですよ」

――まぜこぜを体験すると変われますか

「色とりどりの人たちと過ごすのは、ものすごい気付きと学びがあるんです。そうした経験がいかんにか人に成熟させ、人生を豊かにするか。私も最初は どうしていいかわかりませんでした。『結局のところ東さんには自分たちのことはわからない』と言われて謝ったこともあります。でも、分からなくて当たり前。分かり合おうとすることが大切なんです」

――社会も変わる？

「例えば、職場に発達障がいのある人がいると、仕事のペースが違うので、最初は周りもイライラします。ところが、丁寧に教えれば伝わると気付き、その人の特性を重視するようになる。やがて、職場の雰囲気は穏やかになり、みんなが優しくなる。その結果、誰もが対等に心地よく働ける職場になり、仕事の能率が上がり、成績も良くなる。そういうことが起きるんです」

――2020年の東京五輪・パラリンピックにはいろいろな人が日本にやってきます

「気付きの機会が増えるのは間違いありません。ただ、今のままで受け入れられるのかと心配にもなります。もっと当事者を活用してほしい。当事者が声を出しやすい環境をつくれば、ユニークな意見がたくさん出てくる。表現できるチャンスだと期待している人もいっぱいいます。2020年は社会を変えるチャンス。社会がまぜこぜだと気付ける希望の年です」

――私たちにできることは何でしょうか

「『自分の周りに障がいのある人はいない』という声をよく聞きます。でも、本当は、あなたの周りに必ずいます。いないと思ったら、なぜいないのか考えてほしい。あなたは告げてもらえていないだけなのです。街で手助けが必要な人がいたら、思い切って声をかけて、つながってみてほしい。目をそらしたり、知らないふりをしたりしないでほしいんです」（道丸摩耶）

■あずま・ちづる 昭和35年6月、広島県出身。女優として多くのドラマに出演する傍ら、長年、骨髄バンクなど社会活動に取り組んできた。平成24年に、「生きづらさ」を抱えるマイノリティー（少数派）の人たちを応援し、「まぜこぜの社会」を目指す一般社団法人「Getintouch」を設立。

■インクルーシブ社会 意識すると「包み込むような社会」。障害のある人もない人も誰もが分け隔てなく暮らしやすい社会を目指す動きの中で使われるようになってきた。多様性社会や共生社会と同じ意味合いで、人々の多様性を相互に認め合い、誰も排除せず共生できる社会を目指す。

【ユニバーサルデザイン】色弱者が読める電子黒板、高さ83センチのデジタル複合機…日本の製造業は得意のモノ作りに取り入れている！ 産経新聞 2017年1月1日

性別や年齢、国籍、障害の有無などにかかわらず、全ての人が利用しやすいように配慮された「ユニバーサルデザイン（UD）」は、多様な人たちを優しく包み込むインクルーシブ社会の実現に欠かせない。世界中から多様な人たちがやってくる2020（平成32）

年東京五輪・パラリンピックに向け、UDの重要性は一段と高まっている。日本の製造業は得意のモノ作りにUDを取り入れ、優れた製品を生み出し続けている。UDの考え方は製品にとどまらず、住宅や建築物、公共空間、交通機関などの設計のほか、目に見えない社会の仕組み作りにも生かされている。

カラーユニバーサルデザインに対応したパナソニックの電子黒板「TH-65BF1J」(門井聡撮影)



■富士ゼロックス

富士ゼロックスは、車いすの人が使いやすいデジタル複合機を1990年代から作り続けており、オフィスのユニバーサルデザイン化では草分け的存在だ。

昨秋発表した最新モデル「Ap



eosPort (アペオス・ポート) -VIC」は、床から用紙を乗せるガラス面までの高さが83センチで標準モデルに比べ17センチも低い。「カバーが持ち上がると、手が届かない」という車いすのユーザーの声に応えた設計だ。

視聴覚に困難を抱えた人や高齢者の使用も想定し、拡大文字を使った大型カラー操作パネルや音声案内機能も搭載した。こまやかな配慮を使いやすく洗練されたデザインに反映している。

ユニバーサルデザイン担当の浅田菜美江さんは「お客さまから寄せられる声を元に研究開発を重ねている」という。人口減少社会では、多様な人材の活用が欠かせない。老若男女、障害の有無にかかわらず、働きやすいオフィスを目指している。



■パナソニック

パナソニックが開発したタッチスクリーン液晶ディスプレイ「BF1シリーズ」は、色弱者にも正しく画像情報が伝わることを目的とした電子黒板だ。電子黒板で初めてカラーユニバーサルデザインの認証を受けており、小中学校など教育現場での幅広い採用を目指している。

電子黒板は簡単に図表や写真を表示できるほか、画面にタッチして字を書き込める。カメラを接続して臨場感ある映像を流すことも可能だ。ただ、従来の製品で表示される赤や緑は、色弱者にとって他の色との区別がしづらく、文字や線が背景に埋もれて見えにくいとの指摘もあった。

BF1シリーズは「赤青緑」の光の三原色を微妙なバランスで調整。赤をオレンジがかった色味にするなどの工夫で、他の色と見分けがつきやすくした。またメニュー画面やリモコンのボタンなどにも、判別しやすい色を使っている。同社のマーケティング部の藤川絵利子主務は「先生が、文字の色を気にせずに教えられる」と、製品のメリットを強調した。

■積水ハウス

日本の住宅では玄関の「上がり框(がまち)」に腰掛けて靴を脱いだり履いたりするのが一般的。ただ、上り下りの負担を減らすため、高さを低くすると、腰を掛けづらくなる。ユニバーサルデザインの観点から、積水ハウスは上がり框に代わるベンチを開発した。

消費者34人を招いた実験を重ね、高さ44センチ、奥行き47センチという最も使い勝手の良いベンチのサイズを割り出した。素材にもこだわった製品は、平成27年の「IAUDアワード」の住宅設備部門に選ばれた。

日本の住宅に多い「廻(まわ)り階段」にもユニバーサルデザインが生きている。踊り

場はなく4段で180度方向転換する。60度▽30度▽30度▽60度と1段ごとに向きを変えると安全性が高いとされるが、これは同社と建設省（現国土交通省）の研究成果だ。

同社総合住宅研究所の田中真二部長は「ユニバーサルデザインを考える上で段差は大きなテーマ。安全、安心や使いやすさを前提にデザインの研究を進めたい」と話す。

【ユニバーサルデザイン】「デザインの先には常に人がいる」 国際ユニヴァーサルデザイン協議会の川原啓嗣専務理事インタビュー

産経新聞 2017年1月1日

今なぜ、「ユニバーサルデザイン」(UD)が必要とされ、注目が集まっているのか。UDの普及に取り組んでいる「国際ユニヴァーサルデザイン協議会」(IAUD)の専務理事で、名古屋学芸大学大学院の川原啓嗣教授(工業デザイン)に話を聞いた。

デザインという言葉には本来、設計や計画、意匠といった広い意味があり、社会の仕組みやシステム作りにもデザインという言葉が使われるようになってきた。目に見えるもの、手で触れるもの以外にも、デザインの発想が必要になってきたためだ。

国際ユニヴァーサルデザイン協議会の川原啓嗣専務理事

デザインの先には常に人がいる。人のために良い製品を作る、良いシステムを作ることが目的だったはずなのに、それが忘れられてしまった。その反省からデザインという言葉の前に、あえて「全てに共通する」という意味のユニバーサルを付けて、もう一度考え直そうという動きになった。全ての人を包み込み阻害しないという意味で、インクルーシブデザインとも言うし、ヒューマン・センタード・デザインという言い方もある。人間中心デザインと言うのが、一番ピッタリとくる。



人間中心といっても一人一人の体格はバラバラで、身体能力も違う、性別、年齢も違う。国籍、宗教、食生活の違いもある。違いがあるのが人間。その違いを細かく分析して対処しなければならない。

あらかじめ計画を立て設計し作り上げていくというのがデザインの発想。これをきっちりとやれば最少のコストで問題を解決できる。例えば、最初から車いすの人や足腰の弱った高齢者が利用することを考えて設計すれば安くできるが、後付けだと高くなる。

自分は健常者だと思っても老いて動けなくなることもある。障害のある子供がきちんと自立して生きていけるようにする。将来のことを想定して長いスパンで社会環境を整えていく必要がある。

東京五輪・パラリンピックは社会を作り直す大きなチャンス。海外からいろいろな人が日本にやってくることで、いろいろなことに気付くことができる。多様性を受け入れれば、必ず社会の質は高まる。まさに「ダイバーシティ・インクルージョン(多様性を包み込むこと)」が求められている。

■国際ユニヴァーサルデザイン協議会(IAUD) ユニバーサルデザインの普及と発展を目的に平成15年に設立。業種・業態を超えた共同研究プロジェクトのほか、UD社会の実現に向け、人材育成を目的としたUD検定や団体・個人を表彰するIAUDアワードなどを行っている。

参拝者を迎える 愛らしい西の絵 射水神社、障害者作品展

中日新聞 2017年1月1日

NPO法人「障害者アート支援工房ココペリ」(富山県高岡市伏木古府元町)に所属する障害者八人による作品展「七つの彩(いろ)の祝い酉(とり)」が一日、同市古城の射水神社で始まる。

拝殿横には、大絵馬（幅、高さ一・八メートル）も飾られ、花に囲まれたニワトリとひよこが愛らしく描かれている。参集殿の廊下には十五点を展示。縦一・二メートル、幅一メートルの大作は、ひよこを連れるニワトリが題材。墨で力強く描かれたひよこは、人のようなおどけた表情が目を引く。六回目の今年は、小さな絵馬とバッジも取り入れた。十五日まで。

愛らしい酉の絵で参拝者を迎える大絵馬＝31日、富山県高岡市古城で

嶽徹権禰宜（ごんねぎ）は「初詣の折に個性豊かで鮮やかな絵を見てもらい、皆さんの良い一年のスタートとなれば」と話している。（高島碧）



パラ陸上 辻沙絵 「感動をありがとう」で終わらせたくない 東京で表彰台の一番上に
毎日新聞 2017年1月2日



笑顔でピースサインをする辻＝竹内紀臣撮影

リオデジャネイロ・パラリンピックの陸上女子400メートルで銅メダルを獲得した辻沙絵（22）＝日体大。2020年東京パラリンピックまで3年。辻沙絵は何を思い新しい年を迎えたのか。【構成・岩壁峻】

競技転向し1年半 シンデレラストーリー

リオでの私の姿を見て、シンデレラストーリーと言われることがあります。健常者と競っていたハンドボールからパラリンピック競技に転向し、1年半ほどでメダルを獲得。世間の反応も分かるけど、過程も理解してほしかったと思っています。準備段階でつらかったこともたくさんあったんですよ。選手村ではベッドと壁の間に挟まって「行きたくない！」と、初めてレースが怖くなりました。

輝け！！大阪のパラアスリート 背泳ぎ・大向 20年東京、夢じゃない /大阪

毎日新聞 2017年1月1日



頸髄損傷からカムバック 作業療法士目指し、文武両道生活

2016年12月初旬の大阪市此花区の市舞洲障がい者スポーツセンターのプール。府立大4年の大向優貴さん（24）は時折コーチと言葉を交わしながら、約2時間、レーンの中を泳ぎ続けていた。目標は東京パラリンピックの舞台だ。19歳の時、プールでの事故で頸髄（けいずい）を損傷して車椅子生活となったが、水泳が好きな気持ちは抑えきれず、1年後、プールに戻ってきた。

奈良県曾爾村出身。

「まだまだ習うことがたくさんあるんです」と笑う大向優貴さん＝大阪市此花区の市舞洲障がい者スポーツセンターで、井川加菜美撮影

【酉年に翔ぶ】さいたま市立植水中・小池さくら選手 東京パラ、競泳で頂点目指す

産経新聞 2017年1月2日



幕を開けた平成29年、酉（とり）年に飛翔が期待される若きアスリート2人に抱負を聞いた。2020年東京パラリンピックに水泳競技で出場を目指す中学3年、小池さくらさん（15）だ。



「もう少し早く記録が出れば、リオパラリンピックに行けたのに…」昨年7月に同大会7位相当のタイムを記録した15歳は、笑顔の中に悔しさをにじませた。

インタビューに答える小池さくら選手＝川口市東領家

生後11カ月で患った脊髄硬膜外血腫の影響で、両足にまひが残った。それでも「スポーツは好き」と2歳から乗馬を始め、保育園時代からは水泳も。小学4年からあゆみスイミングスクール（越谷市）に入った。

エンジンが掛かったのは、中学入学前。紹介を受けて中部障がい者水泳連盟の強化合宿に参加し、一生懸命に練習する選手たちの姿に「格好いい」と感銘を受けた。

「本気でパラを目指したい」。現在師事する峰村史世ヘッドコーチ（45）にそう話し、中学1年から競泳の世界に飛び込んだ。

めきめきと頭角を現し、昨年1月には豪州でのビクトリアオープンで400メートル自由形（運動機能障害S7）など3種目で日本新記録を樹立。峰村コーチによると、急成長の要因は「練習でセーブせず、持てる力を出し切っていること」。夏には肩幅が広がって今まで着ていた制服が入らなくなったという。

輝かしい競技歴だが、本人の記憶に強く刻まれているのは、リオデジャネイロパラリンピック出場を逃した昨年3月の春季静岡水泳記録会だ。選考会を兼ねた会場には今まで参加した国内外の大会より多くのメディアや観客が集まり、空気が張り詰めていた。「もしタイムが出なかったら…」。マイナス思考が影響したのか、同種目で参加標準記録を切れなかった。

4カ月後の7月に開かれたジャパンパラ水泳競技大会では、同種目で5分47・17秒を記録。これを静岡で出していれば、パラリンピック出場の可能性があった。「悔しいのと、うれしいのと半々だった」と複雑な表情を見せた。

峰村ヘッドコーチは今後について「泳げば速くなる段階を越えた。世界で戦うにはテクニックが求められる」と話す。「基本的な技術と体力がついてきた」とする一方で、ひとかきで大きく進めるようにしたり、下半身で受ける水の抵抗を減らすようにすることなどを課題として挙げる。

「今後の目標は」と本人に記者が問うと、「2020年の東京パラリンピックで金メダルを取ること」と即答。ホープが見据えるのは世界の頂点だ。（宮野佳幸）

【プロフィール】小池さくら

こいけ・さくら 平成13年4月3日生まれ。さいたま市立植水中学3年。峰村パラスイムスクワッド所属。男性7人組ダンス&ボーカルユニット「GENERATIONS from EXILE TRIBE」のファンで、競技前にはその楽曲を聴く。

バリアフリー温泉、熱い人気 ホテルも需要掘り出し 鈴木洋和

朝日新聞 2017年1月1日

車いすでも、足腰が弱って介助が必要な高齢者でも楽しめる「バリアフリー温泉」が、全国各地で人気を集めている。観光庁や旅行会社も後押ししている。

先駆けとされるのが、富士レークホテル（山梨県富士河口湖町）だ。バブル崩壊で宿泊も宴会も落ち込んでいた1999年、当時常務だった井出泰済（やすなり）社長が「新しいものに挑戦しなければ」と、ユニバーサルデザインの客室をつくった。

入浴介助用のリフトが付いた富士レークホテルの貸し切り風呂。窓の外には河口湖が広がる＝山梨県富士河口湖町



5年ほど前には河口湖を望む「レークビュー貸切風呂」に、入浴介助用のリフトを付けた。利用者は同行者らの介助を受けて洗い場でリフトに乗り、湯船に移動できる。事前に予約すれば別料金で介助スタッフも呼べる。

2011年の東日本大震災後、全国的な行楽自粛ムードで利用客が激減し、特色を打ち出そうとより一層バリアフリー化を進めた。現在、74室のうち23室がユニバーサルデザインで、障害者や高齢者のリピート率は約40%と高いという。

ブレイク！ 静かなヒット Eテレ「ねほりんぱほりん」 人形たちの赤裸々トーク



日本経済新聞 2016年12月28日
トークは先に収録。その日のゲストの服装に合わせ、人形の服をわざわざ作る。人形を操るスタッフも収録を見て、ゲストの動作に似せた自然な動きを人形につけている。

NHKEテレの「ねほりんぱほりん」(毎週水曜午後11時～)が注目を集めている。人形劇の形を取りながら、毎回テーマに沿ったゲストを迎え、赤裸々なトークを繰り広げる異色の番組。2回の特番を経て、10月からレギュラー放送を開始。ツイッターでは番組名を含むツイート数が2カ月で

8万件を記録した。

ネットを騒がせているのが、そのテーマだ。「偽装キラキラ女子」「元薬物中毒者」「ハイスペ(ハイスペック)婚の女」――。きわどさ、過激さは民放の深夜バラエティー並み。大古滋久チーフプロデューサーは「人間を深く掘り下げる。それをそのまま伝え、知ってもらうことも教育的な番組を放送してきたEテレの本質」と語る。

人形劇という手法が、内容の過激さを和らげるとともに、ゲストをリラックスさせ、本音を聞き出す効果をあげている。進行役は2匹のモグラ、ゲストはブタの人形の声で登場する。ブタは衣装もゲストが着ている服と同じだ。訳あって話者の顔が出せない場合、テレビではモザイクや音声を変えるのが一般的。しかし「みんな一緒に見えてしまうので、出演者の感情や雰囲気伝わりにくい」(大古プロデューサー)。人形を使うことで、その壁を越えた。

1体につき2人ほどで動かす人形の身ぶりは、まるで人間が出演しているかのように自然でリアルだ。衝撃的な告白を聞いたときにはモグラが目目を白黒させ、かぶっているヘルメットが飛ぶ。生々しい話とかわいらしい人形のギャップも話題を呼んでいる。

綿密な取材が番組を支える。あらゆるつてを頼り、出演者を探す。さらに証言に嘘がないか、ディレクター2人が聞き取りを行い判断する。同じような境遇の人に複数取材したVTRも挿入し、ドキュメンタリーを作るのと同じくらいの手間暇をかける。

もともと「テレビ離れが進む中、ネット(重視)の人にどうしたら見てもらえるかを考えた」(大古プロデューサー)というだけに、SNSを使ったPRにも力を入れる。公式ツ

イッターに後日談を載せたり、放送内容をブログでまとめたりと、ネット上で拡散しやすい工夫を凝らしている。人形劇というNHKならではの武器で、新たな視聴者の獲得に挑んでいる。(赤)

障害ある生徒に職業検定 京都府教委、就労支援で来年度から



京都新聞 2017年01月02日
検定結果を踏まえ掃除の仕方を学ぶ生徒（京都府城陽市・城陽支援学校）

障害がある生徒の就労を後押しするため、京都府教育委員会は来年度から、実技試験に基づく独自の検定制度を導入する。できる作業が増えたことを評価する仕組みで、本年度は「清掃検定」を試行した。

就労に向けた教育の技能を競う大会としてアビリンピック（高齢・障害・求職者雇用支援機構主催）があるがレベルが高く、22種目に出場できるのはごく限られた生徒のみだ。府教委は1～10級に分けた独自検定制度で、生徒の技能を企業に示しやすくし、生徒の意欲向上を狙う。

「できない」といった観点ではなく、希望者を対象に、できた項目数が増えるほど級が高くなる仕組み。11月に府内の特別支援学校6校が参加した「清掃検定」では「雑巾やモップを安全に扱えるか」「壁にあてずにほうきで掃けるか」など35項目に生徒が挑んだ。

職業学科を来年度に新設する城陽支援学校（京都府城陽市）では2年生17人が受検。3級だった越智涼太さん（17）は「思ったより厳しい評価だったが、練習の成果が出せた。上級を目指して来年も受けたい」と話す。

府教委はほかに、「接客検定」や「パソコン実技検定」などの導入を検討している。特別支援教育課は「企業と連携しながら、検定内容を決め、認知度、信用度を上げたい」としている。

地軸 平和鳥

愛媛新聞 2017年1月1日

子どもの頃、「水飲み鳥」が家にあった。原色の液体が封入され、ぜんまいも電池もないのに動き続けるといえばお分かりだろうか。飽きずに眺めたのを覚えている▲頭を覆うフェルトがぬれて気化熱で温度差が生じ、胴体の液体が頭へ上昇。頭が重くなって傾き「水を飲む」と、液体が胴体へ流れて起き上がる。原理を簡単に説明するとこんなところ。むろん、知ったのはずっと後になってから▲酉（とり）年が始まった。十二支に割り当てられるのはニワトリだが、一般的な「鳥」と広く捉える向きもあるようだ。年賀状の素材集にはウグイスやクジャクもあった。フクロウやオウムと触れ合えるカフェに聞くと、先月は熱心に撮影する客が特に多かったという。ひよっとしたら手元に届くかも▲カフェを訪れた経験はなくても理屈抜きに癒やされるのは想像できる。飼いたいと望む人がいるのも理解はするが、立ち止まって熟考を。大型の鳥は総じて寿命が長い。例えばオウムは30～50歳は当たり前、100歳超の記録もあるとか▲昭和の印象が強い水飲み鳥も長寿だ。今も売られている。商品名は「平和鳥」「幸福鳥」など。お辞儀にも見えるユーモラスな動きを思うと、何となくふに落ちる▲フクロウは「森の賢者」と称される知恵の象徴。人知を集め平和な世界へ歩みを続けたい。もし苦難に見舞われても、乗り越えた先に幸福が満ちる。そんな年であるよう願ってやまない。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行